

# 幼児の人体の認識について

堀 端 孝 治

## 1 はじめに

最近、オリンピックの影響もあって、幼稚園でも運動能力の発達促進や健康の管理についてとくに力を入れてきており、こどもたちも遊びの中に運動的要素が多くなってきたように思われる。この「とびはね廻る」時代には健康保育は重要なものであるが、それは精神的保育と深い関係にある。この複合した保育のために、教師は実際の指導面において日夜研究を重ねていると思う。

ここで、とりあげた人体の認識は、幼児にとって全く身近かに直接体験している身体についての未分化な認識の実態を把握しようとしたものである。その理由は幼児にとって新しい事物に関する概念

を把握する場合、その前提となり、

基礎となるのは自身の身体的実感ではないかと思われるし、また、

愛情や道徳的心情も身体的触感・感激的体験によって育ってくるのではないかと考えるからである。

健康保育においても、そのレディネスとして幼児は人体についてのどのような興味をもち、どの程度の知識をもっているかについて、しっかりと理解して指導することが

必要ではないかと考えられる。二年前、小・中学生の人体概念について調査してみたところ、小学三年生では、すでに人体のつくりについてよく理解していることが農山村の児童においても、都市の児童においても見られたことから、理科教材として二年生にもってきてもよいのではないかと考えた。それから、性教育に関してであるが、小学校三、四年位までは地域差も男女差もなく、比較的多く指摘していたが、五、六年以後になると、ほとんどなく、わずかに都市の小・中学生（男）にあらわれる程度である。これは第1図の如く、図の中にかき入れる方法をとったことにもよるが、性に対する興味が高まるとともにかきあらわさなくなったと考えられる。そこ

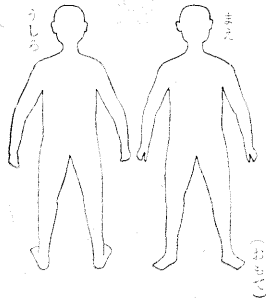
で幼児の場合はどうあらわれてくるかと考えた。

## 2 調 査

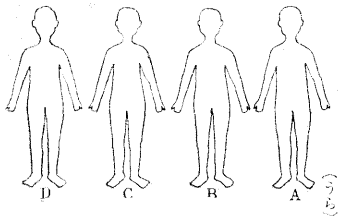
幼児が人体についてどのような知識をもち、そして人体の働きについてどのように考えているかを昭和三十九年一月より四十日ばかりの間、名古屋市内A幼稚園児(四十五名)を対象として調査した。調査方法は個人面接法と描画法を併用した。

### (質問内容)

①人体内容の知識、第1図を幼児に与えて、次の指示をした。「この絵は何の絵でしょう。そう！人間の絵ですね。この人の耳はどこにありますか。赤鉛筆でかいて下さい。この耳のように、私たちの身体にはたたくさんの名前がついています。あなたはどれだけ身体の名前を知っていますか、この絵の中に知っているだけ、たたくさん



第 1 図



第 2 図

かいて下さい。それから、もう一人の絵はうしろをむいていますから、それにもかいて下さい」しばらくしてから、「身体の中の見えないところの名前も知っていれば、かいて下さい」と指示を与えた。

②心臓や肺についての考え、第2図(A)を示し、次の質問をした。

「人間の身体の中に心臓があります。それはどこにあるのでしょうか。また、どんな形をしているのでしょうか。この中にかいて下さい」肺についても同様の質問をした。

③骨についての考え、第2図(B)を示し、次の質問をした。「人間の身体には骨がたくさんあります。それはどこにありますか。また、どんなになっていますか。かいて下さい」

④消化の働きについての考え、第2図(C)を示し、次の質問をしました。「私たちはゴハンをたべたり、お菓子を食べるとき、口から食べますね。その口から食べたものは身体の中のどこを通過して、どこへ行ってしまおうのでしょうか。口から順に食べたものの通りみちをかいて下さい。しまいにどうなるかをはっきりかいて下さい」なお、第2図(D)は自由に人物画をかかせた。この間、一人三十五分(平均)を要した。

### 3 幼児の人体内容の知識

調査の結果は第1表より第3表に示した。それからみると、幼児のあげた人体内容の傾向は、顔の中の名前や毛髪が多く、人体のつくりからみると、神経系や外皮組織についての名がよく知られてい

第1表 幼児に多くあげられた人体内容

順位	年少児 (20名)	年長児 (25名)	アメリカ 4才～6才 (21名)	小3,4年 (179名)
1	目 15	目 25	骨 13	肺 147
2	口 14	口 25	血 12	心臓 145
3	鼻 12	鼻 22	口 10	胃 111
4	頭髪 10	頭髪 21	心臓 5	目 104
5	足 8	へそ 17	扁桃腺 3	口 102
6	手 6	乳房 15	—	腸 102
7	四肢骨 5	手 14	—	背骨 98
8	背骨 5	まゆ毛 14	—	鼻 95

第2表 幼児のあげた人体内容の  
体系別項目数と頻数

身体体系	年少児		年長児	
	あげた 項目数	頻数(%)	あげた 項目数	頻数(%)
骨格・筋系	5	14 (13)	6	20 (8)
循環器系	2	3 (3)	0	0 (0)
呼吸器系	0	0 (0)	1	1 (0)
脳・神経系	2	27 (25)	4	50 (20)
消化器系	3	16 (15)	3	36 (15)
排泄・性器	2	6 (6)	3	24 (10)
外皮組織	5	18 (17)	5	39 (16)
その他	8	24 (21)	15	77 (31)
計	27	108(100)	37	247(100)

第3表 幼児一人当りの平均項目数

	年少児	年長児
M	5.4	9.9
α	3.18	2.53

骨(年長児九名、年少児五名)についての考えと幼児にあげられなかった肺についての考えを絵で表わさるところを第4表から第5表に示した。  
心臓についてみると、半数は知ら

ることを示している。そして頭・へそ・手・足など身体づくりから言って分類ができない一般的呼び名が最も多くあげられている特徴がある。これは概念の発達未分化性を示す概念の融合的段階にあると言える。このことは「幼児の美の概念の特徴」について調査(一九五二年)した結果、お母さんが例外なく、幼児にとって美しいのは、きれいな洋服や指輪をもっているからであり、またやさしく、可愛がってくれるからである。美と善、美と富とが融合して、分化していないのと同様の傾向であろう。また、性器について比較的年長児が多くあげている。

さて、年長児は年少児より項目数において多くあげているが、そ

の項目の内容についてみると、ともに身体内部について、例えば、骨や内臓血管などがあまりあげられていない。とくに米国の児童とくらべても血や骨の名が少ない。これは身体についても外から見るところのみに関心があって、内部構造にまで理解しようとする知的レディネスが高まっていることの原因と言える。その点、小学生の段階になると、七割のものが心臓、肺、そして胃・腸をあげるようになる。また、骨の名も急に多くあげられてくるのは知識量の発達を示しているのみならず、内容の質的変化もみられる。

#### 4 心臓、肺そして骨についての考え

前問の人体内容であげられたもののうち、心臓(年少児二名)や

ないか、または二つ以上心臓があると考えている。一つの心臓を胸にかいたのは年少児で一名、年長児で十三名にすぎない。そして下腹、頭、肩そして首に心臓があったり、手首にあると考えているのは幼児らしい特徴を表わしている。形状・大きさにおいては腹一杯に大きく円形・だ円形で示しているものが多く、中に一名時計の絵を腹にかいているものがあった。

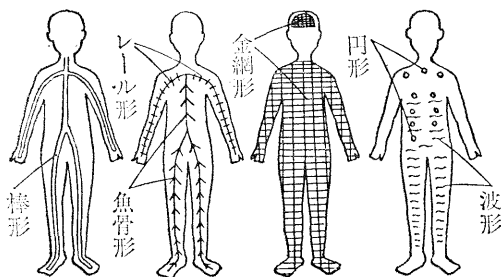
肺では胸の両側にだ円形でかいたものは一名もなく、心臓の如く一個か三個以上を腹に円形で示したものが七名いるにすぎず、八割以上がかけなかったのも無理はない。心臓も肺もともにどんな働き

第4表 心臓、肺についての考え

(心臓)		年少児	年長児	(肺)		年少児	年長児
無解答		60%	32%	無解答		90%	80%
解答		40%	68%	解答		10%	20%
数	1つ	25%	60%	数	2つ	0%	0%
	2つ以上	15	8		1つ	0	20
					3つ以上	10	0
位置	正答(胸)	5	52	位置	胸	0	4
	腹	52	8		腹	10	16
	頭	0	4	形状	だ円形	0	0
	首	5	0		円形	5	20
肩	0	4	その他		5	0	
形	正答	0	4	正答	正答	0	4
	○	30	40		大き	10	8
状	□	10	20	小	0	8	
	時計	0	4	大き	0	0	
大きさ	正答	5	36	小	0	0	
	大き	20	20	小	0	0	
	小	15	12				

第5表 骨についての考え

あげた骨の名	年少児	年長児	骨の形状	年少児	年長児
頭の骨	10%	40%	円形	20%	4%
背骨	30	72	金網形	10	16
肋骨	20	40	波魚形	15	4
骨盤	5	4	魚骨形	40	36
手足の骨	30	52	レール形	20	25
手鎖骨	0	4	棒形	5	10



第3図 骨の形状

をするかをかいた子についてたずねたところ、ほとんど胃と混同して考えているようであった。次に骨についてみると、背骨や手足の骨が多くかかれ、次いで肋骨、頭の骨が多い。幼児の骨についての表わし方の特徴は第3図に示したように魚の骨の形、線状、波形、金網形などにみられる。とくに魚の骨と人間の骨を混同しているのである。なお、亀の如き甲らの骨や二本の背骨をかいているものもある。幼児において骨の概念の発達段階をみると、第一が円形や金網形で示されたもので、第二は波形と魚骨形で小学三、四年位までみ

第6表 消化についての考え

口 → 排泄	年少児	年長児
直線的表現	75%	44%
曲線的表現		
胃なし	10	4
胃をかく	10	44
胃腸をかく	5	8

られる。第三段階はレール形あるいは線状となり、ほぼ、この段階では骨の位置も正しく示されてくる。最も発達した段階は棒状になり、関節のある骨がかかれてくるが、二名の幼児がそれを示していた。その中、一名は医師の子であった。

なお、骨をかいた子に「骨は何のためにあると思いますか」「骨がないとどうなりますか」と質問してみると、前問についてはほとんどわからないと答え、後問では死んでしまう、タコのようにクニャクニャになってしまうという幼児的な直観的印象によって答えた。

### 5 消化の働きについての考え

日常生活の食事に関する問題であるため、全幼児が答えた。しかし、口からお尻まで直線がかいたものが半数をしめ、口↓おなか↓お尻で示したものが三割いた。腸の存在を示したものは三名であった。しかし、胃や腸をおなかによって代表しているのが幼児の段階であろう。おなかをかいた子に

食べたものはおなかでどうなるかを質問してみると、大便を作るという行動的回答が多く、こなす働きをするという答えは四名あったのみである。

なお、しつけにおける影響かと思われる答えがあった。それ

は食べるとき、右側でよくかんで食べると、食べたものは右の手・足の方へ、また左側でよくかんで食べると、左の手・足の方へ行く。そして真ん中で食べると、身体の内側の方へ行くと言っていてくれたのである。したがって、食べたものが最後にどうなるかについてはほとんど大便になってお尻から排泄すると答えたが、二名は手や足の先端から排泄されるとして答えた。

### 6 まとめ

幼児の人体についての認識は直観的、行動的に把握されており、その構造や機能については全く未分化な状態にあると言えよう。とくに内表面は言うに及ばず、外面においても皮膚とか血管など日常生活に関係の深いものがあがってこないのはひどい外傷経験の無いことによるのか、関心がまだ向かないことによるのであろう。乳房をかいたものはお母さんの大きなのをほとんどがかいている点から考えると、日常経験に負うところが大きい。身体内部についての考えでは、幼児らしい想像性が顕著にとらえられた。知識として与えられたものでなく、具体的思考の特徴をみるのに適したものと考える。とくに骨の形状において幼児らしい表現をとらえることができた。

以上から、幼児保育において、その指導内容の如何をとわず、幼児の心理的特性に立脚した方法とその展開を考えゆくことが教師に課せられた重要な問題であろう。ここにとり上げた人体の認識は多くの保育内容に関連していると思われるのである。(愛知学芸大学)